

受刑者と非行少年の再犯予測：リスクアセスメントを可能にする臨床的・統計学的アプローチ

門 本 泉

システム情報工学研究科
社会工学学位プログラム

要 約

矯正施設において RNR 原則 (Andrews & Bonta, 1998/2005/2010) に則った再犯防止を目指すには、受刑者や非行少年といった対象者の処遇プログラムを選択する前提として、まず一人ひとりの「再犯しやすさ」(再犯リスク)を科学的に把握することが必要になる。再犯リスクを査定するためのアセスメントツールは海外で多く開発されているが、日本においてこれに匹敵するツールはまだ開発されていない。そこで、本研究では、日本の受刑者の再犯リスクを評価するための基盤的研究として、再犯に関連するリスク変数の同定と、再犯予測のための回帰式を得ることを目指した。本研究は、以下の3つの独立した研究から構成されている。

まず、再犯リスクを把握する際には、個別面接において集められる情報が重要な判断材料となるが、対象者から正確な情報を集めることは、たとえそれが人口動態的な事実に関する変数であったとしても、しばしば特有の難しさを伴う。なぜなら、彼らの持つ事情は複雑で、面接への動機づけは乏しく、対人適応上の問題が背景にあるからである。このことから研究1では、まず矯正施設の査定面接に注目した。矯正施設の査定面接における課題や困難について整理し、Berne, E.による契約的手法を用いることによって、再犯リスクに関連し得る情報を的確にかつ迅速に収集しやすくなることを3つの事例を用いて臨床的に考察した。また、契約的手法の限界についても考察した。研究2では、査定面接などで集められた情報から、日本の受刑者の出所2年後の再犯と関連する変数を同定するため、男性受刑者2,138名の出所時のデータに生存解析を用いた。その結果、入所歴が多いこと、入所前に無職であったことや住所がなかったことなど、欧米におけるリスク変数と類似の変数が再犯との相関を示し、リスク変数のユニバーサリティが確認できた一方で、武器の使用歴は再犯と相関しておらず、また養うべき15歳以下の子がいる群は再犯が少ないといった、新しい知見も得られた。研究3では、研究2の結果を踏まえて、16項目から成る再犯を予測する有力な変数群を回帰分析を用いて見いだした。最後に、科学的なリスクアセスメントを日本の刑事施設において実践する意義と留意点について論じるとともに、再犯リスクの同定およびRNR原則に則った処遇の展開には、臨床的なアプローチと統計学的なアプローチの両方が互恵的に作用する形で研究が発展していくことの重要性について考察した。